

愛知県における発達障がい支援学生スクールボランティアの研修

——「てびき」の作成を中心に——

山本理絵・三山 岳・奥田 優・畑中悦子・犬飼保夫

I. 共同研究の経緯

特別支援教育体制が進み、各地で大学生もボランティアとして小中学校で子どもたちの支援を行うようになってきている。学生は教育現場で貴重な体験ができ教員養成にとって有益である一方、受け入れ体制、学生による支援方法、学生の研修と力量形成、大学と学校との連携などの点において、課題も多い。

愛知県立大学生涯発達研究所と愛知県総合教育センターは、2010年度から「愛知県内の発達障がい支援学生スクールボランティアに関する共同研究」を行ってきた。ここで「発達障がい支援学生スクールボランティア」とは、学校に在籍する発達障がいのある（疑いを含む）児童生徒の支援に関わっている学生をさす（「学習支援員」、「学生サポーター」、「学生支援員」などと呼ばれることもある）。

この共同研究の一環として、2010年度に「発達障がい児支援スクールボランティア研修講座（全3回）」を実施した。また、愛知県内の小中学校を対象にスクールボランティアの受け入れ状況等についてアンケート調査を行い、2012年・日本LD学会第21回大会・自主シンポジウム「発達障がい支援学生スクールボランティアの実態と課題」、ポスター発表「愛知県における発達障がい支援学生スクールボランティアの現状と課題」で、その結果を報告してきた。（2012年度末発行の調査報告書「愛知県内小中学校における発達障害児支援学生スクールボランティアの実態と課題」参照。）

調査の結果、発達障がい支援学生スクールボランティアに関する要望として多かったものとして、「教育委員会や大学主催の学生用の研修」（小学校の64.0%、中学校の72.8%）があった。

そこで、引き続き、2013年度～2015年度共同研究として「発達障がい支援学生スクールボランティア研修に関する研究」を行っている。

II. 研究の目的

愛知県教育委員会では、2007～2010年度に「学習チューター派遣事業」を実施し、その後、高校生・大学生・教職員のためのマッチングサイト「あいちの学校連携ネット」にも各地の学生ボランティアの募集を掲載しており、学生ボランティアを受け入れている学校は増加してきている。しかし、学生は担任教師との打ち合わせが十分取れない中で活動を行わなければならない状況があり、事前の研修等により活動の質を高めるしくみが求められている。

ボランティアに行く学生を集めての研修は頻繁には時間を設定しにくいと、我々の共同研究として、必要な情報を収めた「てびき」を作成し、全県で研修の一環として有効に活用してもらうことで、発達障がい支援を中心とした学生ボランティアの質を高めていくことを検討した。「スクールボランティアのてびき」を作成することは県内教育委員会及び各学校、大学からも期待されており、「てびき」を県下の全小中学校や特別支援学校、教育委員会、関係大学へ配付する計画を立てた。

そこで、これから発達障がい支援を中心とした

スクールボランティア活動を始めようとする学生及びそのような学生を受け入れようとする学校等にとって、読んで基本的な知識や構えを得ることができるような「てびき」の内容を検討することとした。

Ⅲ. 研究方法

学生ボランティアを受け入れている学校や学生ボランティアを派遣している他大学の情報収集、支援員の研修を行っている団体等の情報を収集するとともに、愛知県立大学での発達障がい支援学生スクールボランティアの指導を行いつつ、「てびき」の内容を検討する。

愛知県立大学の発達障がい支援を中心とした学生のスクールボランティア活動の学内研修・報告書、インタビューをもとに、活動状況・課題を把握し、「てびき」作成に活かす。

Ⅳ. 結果

1. 「てびき」の構成

「てびき」は、愛知県内全域に配付する予定であるため、細部は各学校の状況に合わせて考えてもらえるように、一般的な内容、あるいは一事例として掲載することにした。中心的な内容は、発達障がい支援に関することであるが、日本語指導を必要とする外国籍児童生徒支援や小学校外国語活動支援、幼稚園・保育所での保育支援の目的でボランティア活動を行う場合も、学級の中には発達障がい（疑いを含む）の子どもがいることがあるため、そのような学生も発達障がいについての知識を得られるように配慮した。「てびき」全体の構成は以下のようである。

はじめに（スクールボランティアの意義）

1. 学校のしくみ

- ・通常学級・特別支援学級・通級・特別支援学校・適応指導教室等
- ・スクールカウンセラー・特別支援教育コーディネーター・社会人ボランティア等

- ・小中学校の1日、幼稚園・保育所の1日
 - 2. ボランティア活動の心得、諸注意、保険
 - 3. ボランティア活動の内容・種類
 - ・発達障がい支援・学習支援・放課後支援
 - ・外国籍児童生徒支援
 - ・小学校外国語活動支援
 - ・保育支援
 - 4. ボランティア活動の手続き方法
 - ・ボランティア活動をやってみたい学生は
 - ・ボランティアを受け入れたい学校は
 - 5. ボランティア活動が始まったら
 - ・子どもとのかかわり方
 - ・先生とのかかわり方
 - ・特別支援教育における配慮
 - ・外国籍児童生徒支援における配慮
 - ・外国語活動支援における配慮
 - ・保育支援における配慮
 - ・こんなときどうする？ Q & A
 - ・記録用紙
 - 6. 現場からのメッセージ
 - ・体験した学生の声
 - ・ボランティアを受け入れた先生の声
- 参考資料・参考文献
- ・発達障がいとは ・手続き関係資料

2. 学生が戸惑う場面

学生の活動報告書や聴き取り調査により、以下のようなケースで戸惑うことが多いことがわかり、Q & Aの形で「てびき」に掲載することにした。

- Q1：授業中、先生の指示に従って取り組もうとしなかったり、板書を写そうとしない子どもには、どのように援助すればよいのでしょうか？
- Q2：授業中、席を立ってしまったたり、教室を出て行こうとする子どもには、どのように援助すればよいのでしょうか？
- Q3：個別支援の時間に、ボランティア学生に甘えて、なかなか課題に取り組もうとしない

子どもがいます。どのように援助すればよいのでしょうか？

- Q4：休み時間に、子どもたちがやってはいけないようなことをしていたときや、喧嘩が起きたときに、どのように対応すればよいのでしょうか？
- Q5：休み時間に、一度に何人もの子どもたちに「一緒に遊ぼう」、「こっちに来て」と言われたとき、どこから順番に行けばよいか、迷ってしまいますが、どうしたらよいのでしょうか？

もとのかかわり方を次第に学んでいっている。担任教師とのコミュニケーションの状況によってもその様相は違って来る。「てびき」に掲載するQに対するAは、個別的断定的に記載するのではなく、子どもの見方・捉え方、かかわり方の基本を記したうえで、あくまでも例としていくつかの支援方法を記載し、学生自ら試行錯誤してもらうことが重要である。「てびき」の内容をさらに検討していくとともに、配布後、学生の活動状況をみながら、改訂していく必要がある。

(*2011～2014年度は愛知県総合教育センター所属)

V. 考察と今後の課題

学生は、ボランティア活動開始当初は戸惑うことも多いが、活動を2～3年続けるなかで、子ども

付記 本原稿は『日本LD学会第24回大会論文集』に掲載したものであり、2015年10月11日にポスター発表を行った。